

品川区医療的ケア児地域生活 支援促進事業運営業務委託 インクルーシブひろばベル R7年度 活動報告



(株)学研ココファン・ナーサリー
インクルーシブひろばベル 看護スタッフ 渡辺
令和 8年 2月 26日

令和7年 9月1日からの変更点

- 令和7年9月1日付で、運営母体はNPO法人フローレンス様から株式会社学研ココファン・ナーサリーへと変更となった。建物も児童発達支援センターとインクルーシブひろばベルと児童館が一体となった施設へ再編。それに伴い、建物全体を同一事業者が運営する体制となり、より連携の取れた支援や柔軟な対応を目指している。
- 工事期間中は仮転設先での運営となっていたが、現在は大原児童センター(戸越6-16-1)に戻り、通常通りの活動を再開している。
- 予約制・登録制については、品川区障害福祉支援課と協議の上廃止とし、誰でも自由に利用できる形として運営。引き続き、医療的ケア児家庭を含むすべての親子が気軽に利用しやすい環境づくりを進めている。
- 医療的ケア児コーディネーターについては、看護スタッフが資格を取得した。あわせて、センター内の相談支援員についても今後取得を予定しており、体制を順次拡大していく。今後は、医療的ケア児を取り巻く関係機関との連携強化を図っていく。
- 活動スペースについては、移転に伴い縮小。現在は常設で1部屋を確保しているほか、時間を限定してもう一部屋（スヌーズレンルーム）の利用も可能な体制としている。

令和8年1月時点の施設の利用状況

(集計期間：R7年9月1日～R8年1月9日)

利用者数	利用世帯数/組	利用人数(児)/人 (医ケアあり)	利用人数(児)/人 (医ケアなし)
品川区	142	11	177
区外	7	0	8
合計	149	11(うち7は団体利用)	185
延べ来館世帯数 (累積)	585(区外9)	18	713(保護者含め1323)

- 区内利用は約95%を占めており、区民向けのひろばとしての機能は安定していると考えられる。
- 利用世帯数149世帯のうち66世帯が2回以上利用しており、ひろばとしては一定の定着が進んでいる状況。
- 世帯数に対する利用児数より世帯当たり利用児数は1.32人/世帯であり、兄弟児利用へのニーズが一定数ある。
- 今後は他機関とのつながりが少ない家庭を含め、個人利用につながりやすい利用の促進が課題。
- 疾患や障がいについては、積極的に病名を聞き取っているわけではないが、把握している範囲では1型糖尿病、下肢の麻痺、低緊張、補聴器の使用、経鼻胃ろうチューブの挿入などがあり、付随する何らかの疾患や障がいを有する児童が含まれる。
- 医療的ケアの内容としては、経管栄養、喀痰吸引、酸素吸入、人工呼吸器の使用、インスリン投与などがある。

令和8年1月時点の施設の利用状況②

(集計期間：R7年9月1日～R8年1月9日)

行ラベル	個数 / 名
0歳児	29.19%
1歳児	35.14%
2歳児	12.97%
3歳児	11.35%
4歳児	3.78%
5歳児	3.78%
6歳児	2.16%
7歳児	0.54%
8歳児	1.08%
総計	100.00%

- 利用者は0歳～1歳に集中しており、特に1歳が最多(35.1%)となった。全体利用の約9割が3歳以下であり、未就園児・低年齢児の利用が中心となっている。
- 団体利用を除き、医療的ケア児も1歳が最多の結果となった。
- 近隣の児童館や事業所からベルを紹介されて来館される方もいた。

相談実績例

・子育てメッセをきっかけに来館した0歳児。母より、子どもが活発で落ち着きがなく発達面に不安があるため、低年齢から受けられる早期療育について情報提供を希望があった。

当ひろば心理士と館内相談支援事業所が連携し相談対応を実施。1歳6か月健診では落ち着きのなさ等は指摘されにくく、3歳児健診頃に課題が明確になる可能性があること、児童発達支援が概ね3歳以降から対象となる現状を説明。

集団生活における課題は一時保育等を活用し様子を見ることを提案し、心配があるからこそ早期に気づける点を肯定。大きな困りごとになる前でも、些細な不安があれば相談可能であることを伝えた。

現在、定期的に来館し、育児不安の軽減を図りながらスタッフと継続的な相談・関わりを行っている。

・中途疾患を発症し、看護師の加配調整中のため保育園を休園している3歳児。医療的ケアの有無にかかわらず遊べる場として当ひろばを知り、来館された。

症状はようやくコントロールがつき始めたものの、今後どのようにセルフケア技術を確立していくかイメージが持てないとのこと。医療的ケアが必要な子どもを育てている方と話してみたいという思いを話された。

相談支援事業所と連携し、区の保健センターおよび親の会を紹介した。保健センターで相談できることはご存じなかった様子で、「いろいろな情報をありがとうございます。連絡してみます」とにこやかに話された。

医療的ケア児コーディネーターとしての活動

医療的ケア児A(0歳)

- 退院後の在宅生活に向け、A児が利用可能な親子ひろばなど地域資源の活用を支援し、外出や交流の機会を確保するとともに、退院後の在宅生活への円滑な移行を目的として、医療的ケア児とその家族の地域生活導入支援に取り組んだ。
- 退院前にはカンファレンス(2025/11/27)に参加し、児童および家族と面会することで、退院後の生活における外出や交流のニーズを把握した。併せて、親子ひろばにおける医療的ケア児への支援内容や利用環境について具体的に説明し、経管栄養の物品、授乳室・給湯設備、器具洗浄の方法などの情報を提供することで、利用に向けた不安の軽減を図った。また、児童の状況を踏まえ、ひろば内で今後必要となる物品や運用面について受け入れ準備の検討を行った。
- 退院後は自宅訪問(2025/12/16)に参加し、在宅移行後の生活状況を確認するとともに、初回外出や親子ひろば利用に向けた不安や課題の整理を行った。その結果、当ひろばが外出時の経管栄養導入の第一歩として機能し得ること、また医療的ケア児家庭同士の交流ニーズが存在することが明らかになった。
- センターの今後の方向性としては、退院直後に相談先が分散しやすい状況を踏まえ、相談の一次集約、簡易的なアセスメント、関係機関・事業所への割り振り、及び導入までの伴走支援を担うことが求められている。段階的に準備態勢を整えていく予定である。

取り組みについて

季節を感じながら楽しめるイベントの他、障がいの有無に関係なく誰もが参加できるスポーツ体験として、児童館と連携しインクルーシブ推進を目的としたオンラインボッチャを実施した。オンラインボッチャでは、近隣事業所とZoomで交流し、医療的ケアを必要とする子どもや障がいのある子どもも遠隔で参加可能な環境を整備した。さらに、3月には移動水族館の開催を予定しており、医療的ケアの有無や障がいに関係なく、すべての子どもが参加できるイベントとなるよう企画を進めている。



今後の展望・課題

3階の児童センター親子サロンの利用者が紹介を受けて来館するケースや、夕方以降には保育園終了後の兄弟児が利用する姿が見られる。こうした状況から、以前のベルと比べ利用者層に変化が見られ、多様な家庭による利用が進んでいると感じられる。

その変化に伴い、健常児と医療的ケア児が同じ空間で遊び、自然に関わり合う様子も見られた。今後は、イベント開催などをきっかけに、誰もが安心して遊びに来られる場所であることをさらに周知し、医療的ケアや障がいの有無に関わらず、子ども同士が共に過ごすインクルーシブなひろばとして、自然な交流の場を増やしていきたい。また、施設内に相談支援事業所が併設されている利点を活かし、発達特性や医療的ケアのある子どもたちを福祉サービスへよりタイムリーにつなげられる体制づくりを進めるとともに、保護者支援の場としての機能強化も目指していく。

加えて、団体利用も見られることから、今後も近隣施設との連携を深め、交流の場としての周知を継続していく。

一方で、障がいや医療的ケアのある子どもを育てる保護者同士の交流を目的として来館する方もいるが、利用時間帯が必ずしも重ならない現状がある。それに対し、交流の機会を創出し継続的につないでいけるようにイベントを再編成した。ニーズに応じて、今後も適宜ブラッシュアップしていく方針である。

施設紹介①

常設スペース
(エアレックスマット設置)



スノーズレンルーム



施設紹介②

医療的ケアがあっても安心して利用できるよう、
身体状況に配慮した座位保持椅子や
S字フック、延長コード、多目的トイレ内のユニバーサルシート
その他、緊急時用吸引機を備えた緊急カートやAED等を配置している。

